

## 令和5年度 船橋市立二宮小学校研究全体計画

船橋市立二宮小学校  
研究推進委員会

### 研究指定2年目の実践から見た3年次の方針

令和4年度は、学校教育目標の『「自ら学ぶ子」確かな学力の育成』を実現するため、研究主題を「自ら学び、互いに高め合う児童の育成」、副主題を「情報活用能力を生かした学びを通して」とし、校内研究を推進した。3年間の研究計画の概要を以下に示す。

#### <研究計画概要>

1年目	組織体制づくりを進めるとともに、教員・児童がさまざまな場面でICTを活用し、機器の操作やクラウドに慣れる。
2年目	教科の学びを深めたり、教科の学びの本質に迫ったりする学習を通して情報活用能力を育成する。
3年目	情報活用能力を生かした教科横断的で創造性を育むような学びを実現する。

令和4年度は、情報活用能力育成の視点で年間指導計画を整理した「二宮プラン」の運用や同時双方向型遠隔授業の検証、学年の発達段階に応じた常時活動の実施などに学校全体で取り組んだ。また、各学級においては「情報活用能力ベーシック」をもとに身に付けさせた力を意識してICTの活用が推進されたことから指定2年目の目標は概ね達成できたと考える。こうした取組が形骸化することなく、よりよいものとしていくためにも、GIGAスクール構想推進委員会や生徒指導特別支援部会をはじめとする校内組織と連携しながらさまざまな視点で今後の方向性を検討していく必要がある。

令和5年3月、千葉県教育委員会は「ICT活用を通して千葉の子供・教員・学校の可能性を引き出す取組～千葉県学校教育DXの実現に向けて～」として令和9年度までの5年間に達成すべき県内各学校の教育DXの実現に向けた施策を策定した。そして、この計画に基づき、学校は各教科の特質に応じて適切な学習場面で情報活用能力（情報モラル含む）の育成を図り、主体的・対話的で深い学びへとつなげていくことが必要であるとしている。

また、Society 5.0時代に生きる子供たちが人生をよりよいものにしていくことができるようにするため、ICTの利点を最大限に生かした教育活動を推進するとともに、ICT活用を通じた、千葉の「子供」「教員」「学校」の可能性を引き出すことを目指すとしている。

そこで、今年度の校内研究においては、これまでに蓄積してきたICTの利点を最大限に生かした教育活動をさらに推進していく。そして、学習者である児童が中心となり、教科横断的で創造性を育むような学習に取り組ませることを通じて情報活用能力の育成を目指す。

## 1 研究主題

### 自ら学び、互いに高め合う児童の育成

#### ～情報活用能力を生かした創造的な学びを通して～

## 2 主題設定の理由

学習指導要領総則では、情報活用能力を言語能力、問題発見・解決能力と同様に学習の基盤となる資質・能力として位置付けている。また、千葉県教育委員会は「千葉県教育情報化推進計画」を策定し、各教科の特質に応じて適切な学習場面で情報活用能力(情報モラル含む)の育成を図り、主体的・対話的で深い学びへとつなげていくことが必要であるとしている。

本校は「けやきの子大地に根をはり大きくのびよう」を教育目標として掲げ、「知・徳・体」の調和のとれた児童の育成を目指している。特に「知」の「自ら学ぶ子」を目指す児童の姿ととらえ、学習意欲の向上を図ることや思考力・判断力を育成すること、コミュニケーション能力・表現力を育成すること、授業のユニバーサルデザインに取り組むことを通して主体的に学ぶ児童の育成を目指している。

また、研究指定2年目の児童の実態より「情報と情報技術の適切な活用」では、全学年においてICTを活用した常時活動の定着、年間指導計画の中で情報活用能力育成場面を意識したICT活用が進み、実態が向上したことが明らかになった。「問題解決・探究における情報活用」では、低学年の情報収集する力、中学年以上の整理・分析やまとめ・表現する力に向上がみられた。「情報モラル・セキュリティ」では、他者にかかわる情報や著作権に対する意識が向上したことが明らかになった。

一方で、全校児童を対象に実施した意識調査より「問題解決・探究における情報活用」の項目で「児童自ら問題を発見し、進んで解決していこうとする意識」に向上が見られなかったことや全国学力学習状況調査(児童質問紙)より、「難しいことでも失敗を恐れずに挑戦すること」「地域や社会をよくするために何をすべきかを考えること」「課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組むこと」「学習した内容について、分かった点や、よく分からなかった点を見直し、次の学習につなげること」に課題があることが明らかになった。

主体的・対話的で深い学びの中心は学習者である児童でなければならない。児童が身に付けた情報活用能力を生かして創造的な学びに取り組みながら自ら課題に働きかけ、多様な他者と協働して学びを深めていくことは、本校の目指す児童の姿につながると考え、本主題を設定した。

### 3 主題についての基本的な考え方

#### 学校教育目標

けやきの子大地に根をはり大きくのびよう

(知) 自ら学ぶ子

(徳) 思いやりのある子

(体) 進んで運動する子

#### 研究主題

自ら学び、互いに高め合う児童の育成  
～情報活用能力を生かした創造的な学びを通して～

#### 「自ら学ぶ」

各教科の見方・考え方と自らの経験や知識、既習を活用しながら見通しをもって課題の設定、情報の収集、情報の整理・分析、まとめ・表現、振り返り・改善に取り組むこと

#### 「互いに高め合う」

個別・集団で設定した課題の解決に向けて、各教科の見方・考え方と自らの経験や知識、既習を活用しながら多様な考え方を組み合わせ、よりよい学びへと向かっていくこと

#### 創造的な学び

個別・集団が納得できる「納得解」や「最適解」を見つけ出し、新しいものを想像していく学習

○正解が1つではない課題を設定する。

○児童にとって必然性のある課題を設定する。

○自分なりの発想力や企画力、想像力が生かされる課題を設定する。

#### 目指す児童像

- 学年や児童の特性に応じて調査や実験、観察等によって情報を収集し、見いだした課題を自分事として捉えることができる児童
- 収集した情報を学年や児童の特性に応じた方法で整理・分析し、伝える相手を意識してわかりやすく表現することができる児童
- 学年や児童の特性に応じて自己や集団の学びを振り返り、学習したことを自分の言葉でまとめたり、学習に対する取り組み方を改善したりできる児童

## 4 研究仮説

正解が1つではなく、児童にとって必然性のある課題を設定できるように働きかければ、自分なりの発想力や企画力、創造力を生かして学習に取り組ませることができるだろう。

### (1) 仮説検証のための手立て

#### ①地域素材を活用する

自分たちの暮らしている町というのは、多くの児童にとって当たり前となっており、よく知らない可能性が高い。地域をテーマに扱う場合には、毎日の生活に目を向けさせ、学習の意味づけを「自分の生活との関連」という視点で考えさせることが必要である。その際、どんな視点で見るかということが課題を設定する上で大切だと考える。例えば、昔と今の船橋市（二宮小学区）を比較させたり、特産物についてクイズ形式で考えさせたり、外国人や店の客になったつもりで地域に目を向けさせたりすることも課題を発見する手がかりになると考える。

#### ②学校生活・行事を活用する

地域素材と同様に、児童にとって当たり前となっている可能性が高いテーマである。しかし、よりよい学校生活や学校行事には正解がなく、目的を知ったり、自分たちの学習してきた知識や身に付けた技能を活用すればもっとよくなると児童に思わせたりすることで新たな価値に気づき、自分事として課題を見つけることができると考える。例えば、合同発表会・卒業を祝う会等の発表や宿泊学習・校外学習等の校外での活動と関連付けることも課題を発見する手がかりになると考える。

#### ③多様な他者とのかかわりを活用する

多様な他者とは、園児や異学年の児童、教員、保護者、地域の方々などを指す。普段の学校生活を送る中では、関わる機会が少ないからこそ、実体験を通してかかわることによって、多様な考えや思い、願いに気づき、夢中になって学習に取り組むことができるのではないかと考えた。例えば、園児や下学年の児童を招待してイベントを開催するというゴールを示したり、保護者や地域の方々の願いに応えたいという思いをもたせたり、外部人材とのかかわりから憧れをもたせたりするような活動と関連付けることも課題を発見する手がかりになると考える。

### (2) 指導の重点

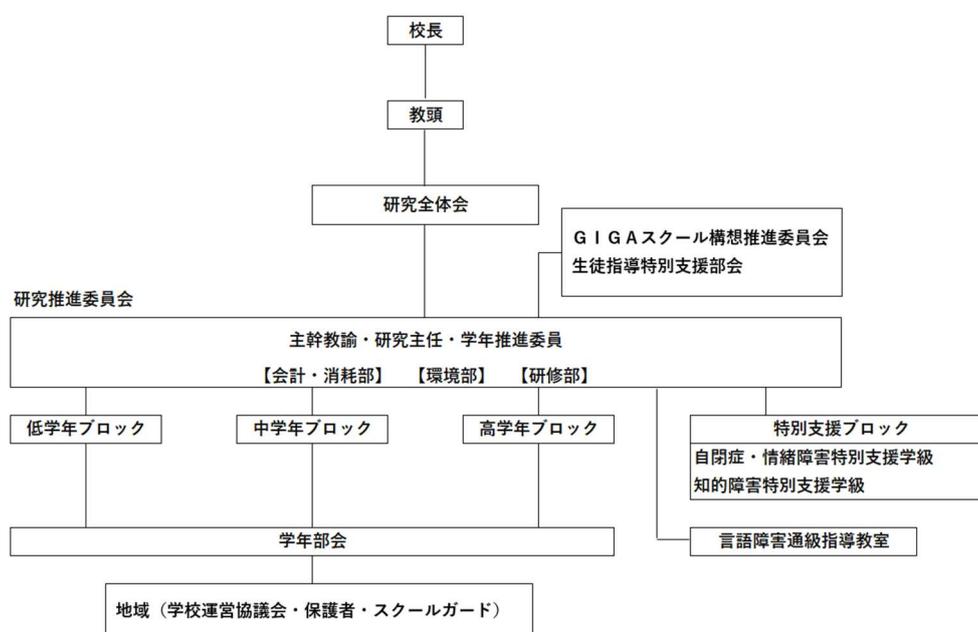
#### ①通常学級

- ・情報を自分事として捉えるための教材や素材の提示方法・発問構成を工夫する。
- ・問題発見や課題解決の見通しにつながる情報の活用方法を工夫する。
- ・情報の比較・関連付けなどを活性化する問いの構成や資料の加工、提示方法を工夫する。
- ・話し合い活動の進め方を工夫する。
- ・情報の処理や共有における効果的なICT活用を行う。
- ・伝わらないこと、伝わったことを実感させる。(リアクションの保障)
- ・活動に十分な時間を確保する。

## ②特別支援学級

- ・一人一人の特性、日常生活の様子、児童の気持ち等を丁寧に見取って、個別の指導計画を作成し、活動を計画する。
- ・やることが分かり、自ら取り組めるような場の設定やお互いを理解し、人間関係を育めるような環境調整を行うことにより、成功体験を味わえるようにする。
- ・振り返りを行うことにより、できたことに自信をもったり、課題に気付いたりし、自己理解を深められるようにする。
- ・家庭や交流学級、在籍学級との連携を進める。
- ・情報の処理や共有における効果的なICT活用を行う。
- ・伝わらないこと、伝わったことを実感させる。(リアクションの保障)
- ・活動に十分な時間を確保する。

## 5 研究組織



## 6 講師・研究協力員の先生方

全体講師	放送大学 客員教授 佐藤 幸江 先生
低学年ブロック	講師：船橋市立坪井小学校 校長 小林 英俊 先生 研究協力員：船橋市立大穴北小学校 教諭 伊藤 優樹 先生
中学年ブロック	講師：船橋市立七林中学校 校長 仲臺 和浩 先生 研究協力員：船橋市立若松小学校 教諭 渡辺 拓也 先生
高学年ブロック	講師：船橋市立宮本小学校 校長 秋元 大輔 先生 研究協力員：船橋市立中野木小学校 教諭 平山 靖 先生
特別支援ブロック	講師：船橋市立高根台第三小学校 校長 藤原 裕子 先生 研究協力員：船橋市立習志野台第二小学校 教諭 戸室 直美 先生
言語障害通級指導教室	講師：船橋市総合教育センター特別支援教育班 副主幹 鰐部 裕実 先生

## 7 令和5年度の校内研究にかかわる取組

### (1) 情報活用能力を育成するための年間指導計画「二宮プラン」の作成

各教科の単元名と時数等が記入されている年間指導計画を基に作成する。「情報活用能力ベーシック」の5つの学習プロセス（①課題の設定②情報の収集③整理・分析④まとめ・表現⑤振り返り・改善）を記号化し、以下の点に留意しながら年間指導計画に位置付ける。

①各学年で単元ごとにどのプロセスにおいて情報活用能力を身に付けることができるかを検討する。

②年間指導計画に学習プロセスの記号（①～⑤）を記入する。

③各教科・領域で月ごとに5つの学習プロセスが入るようにする。

④教科ごとに前期・後期でそれぞれ5つの学習プロセスが入るようにする。

⑤学年会や研究日を活用し、単元終了後に年間指導計画の修正を行う。

### (2) 情報活用能力にかかわる意識調査の実施

年3回（4・10・1月）実施する。本調査によって児童の情報活用能力の実態を図るとともに、情報活用能力育成のための教員の指導状況の実態についても調査を行い、日々の授業改善に活用する。

### (3) 情報モラル・セキュリティの指導・端末使用にかかわるルールの見直し

情報教育年間指導計画に沿って系統的に指導を行う。特に、情報モラルの実践については、保護者向け文書の配付や授業参観での展開などを通して積極的に家庭への発信を行う。また、一昨年度より策定した端末使用のルール（学習のために使う・安全に使う・安心して使えるようにする）については、児童と教員が一体となって適宜見直しを行う。問題となる事例については、生徒指導特別支援部会で取り上げ、対応を検討する。

### (4) 実践報告の作成

各学年・学級の担任は、ICTを活用した実践事例を実践報告（A4・1枚）の形式にまとめる。

### (5) 情報活用能力検定の実施

高学年の児童を対象に実態を把握する。特に6学年の児童においては、昨年度の結果と比較し、変容を考察する。

### (6) 遠隔での授業検証

ICTを活用して長期休業中や特別な事情に対応するためにオンライン授業を行ったり、言語障害通級指導教室における遠隔指導の検証を行ったりする。通級指導の際は、児童の特性や実態、指導内容に合わせてオンライン授業の形態を工夫する。

### (7) 学習者用デジタル教科書の検証

高学年の英語および算数科において使用する。児童の実態や特性、単元のねらいなどにあわせて「紙」と「デジタル」の両方を活用し、学びの効果や課題を整理する。

(8) 学習ドリルの活用

学習ドリル（1～6年：スマイルネクスト、3～6年：モノグサ、自閉症情緒障害支援学級：コグトレ）を活用して児童自らが「何ができるか・何ができていないか」を把握し、学習を調整できるようになることを目指す。しかし、実態や特性によってその理解はさまざまであり、そこには一人一人の学習状況を見取る教師の働きかけが必要である。活用方法をGIGAスクール構想推進委員会で検討する。

(9) 常時活動の実施

児童の実態に応じて以下の常時活動に取り組みさせる。

活動	内容
朝・帰りの会の司会	<ul style="list-style-type: none"><li>・ICTを活用して会を進行する。</li><li>・基本の形式をGIGAスクール構想推進委員会で作成し、各学級や学年で修正する。</li></ul>
1分間スピーチ	<ul style="list-style-type: none"><li>・ICTを活用してロイロノートや写真に保存した画像等を提示しながら行う。</li><li>・「一日のふり返し」で作成した資料等を使ってスピーチを行う。</li></ul>
1分間タイピング 「一日のふり返し」	<ul style="list-style-type: none"><li>・帰りの会にて1分間でその日のできごとをロイロノートにまとめる。続きに取り組みたい児童は、タブレットを自宅に持ち帰って作成する。</li></ul>